

## 禅と太極拳

「文字と言葉で分かろうとし続ける、愛すべき私達自身に捧ぐ」

沢谷進

函館太極拳研究会は 2019 年創立 40 周年を迎える。

自身も現在 62 歳になった。

函館太極拳研究会に育てて頂いた、太極拳人生だった。

21 才の時突然、太極拳ではなくまず坐禅をはじめていた。

それから 40 年のあいだ様々な人生の状況の中でも坐禅は継続している。

それは何故か、はじめての坐禅のときに起きた体験に、強烈な自身の肉体の消失感と同時に、自身の境界のなくなる無限性をみて、愛に包まれ拵がり打ち震え泣いた。

この強烈な体験から、それまで見えてきたものや感じるものが変わった。

人生の意味と方向性が全て変わっていったのだ。

そしてその方向性はどんな時も、いままでも決してかわることはなかった。

何かわからぬままの変わらぬ探究がはじまった。

とはいえ、その後にとんとんと押しよせたのは、その体験を理解しようとする言葉の暴走であり爆発である。

また偶然に起きた体験をまるで自分の物のように再び追い求める猛烈な欲であった。

感覚であり知の判断が効かない、開き切ったような感性の世界と、追体験を求めての欲求の世界に師を持たず生きはじめたことは、同時にいわゆる社会の中で体験したことのない視点で生活して行くことであった。

軌轢があり窮屈なものになっていった。

そんな中、心身的に生き詰まっていったが、やはり 23 才の時にこちらも偶然に澁谷道夫先生と陳有昭先生との函館太極拳研究会創設時の若々しい太極拳にであった。

それから太極拳も 40 年になる。

そして太極拳を何も知らぬまま出来ぬまま、いつの間にか太極拳を毎日教える生活に飛び込んでいた。

朝から晩まで太極拳に関わる生活の始まりである。

それから自身の中身のなさに追い立てられるように、中国への求心力にひきつけられる様に、百回を越える訪中がうまれた。

その中で太極拳の深さと中国伝統文化と古代思想の深遠さにのめり込んでいった。

そして太極拳と気功の練習に打ち込めば打ち込むほど、そのあとに不思議なことが起こった。

それはあんなに苦しかった坐ることが苦しくなくなったのだ。  
太極拳で生活自体が苦しく無くなったともいえる。  
太極拳から坐禅も少しずつ日常生活に溶け込んでいった。  
心身と生活、新しい視点と従来の視点のバランスが取れて行った。  
社会の中で特殊なバランスの生き方がはじまっていった。  
一見全く接点が見えず感じられづらい両者、太極拳と坐禅を共にやり続けている。  
片方ずつでは身近でもよく知るが、両方同時にというのは今まで、陳氏新架式の師匠の北京の王幼復老師と、友人のカナダ人の鄭氏太極拳の使い手 **Raji** の二人しか知らない。  
その二人も生活が禅となり、太極拳が禅となっている。  
なぜ坐禅と太極拳ふたつをやり続ける人生になったのか、自分自身も今も不思議であるが、今となればそれは自身にとっても有り難い出来事、有り難い人生だった。

#### Taichi 太極拳...

偶然はじめ、意味もわけも分からず夢中になった。  
落ち着いてゆったりして同時に完全に覚醒し生死の境目を流れている。  
しかしやはり自分の知るための手段は言葉であり文字であり体験の蓄積であった。  
またそれしか知らない文化と社会、世界に育っていた。  
太極拳が教え示し続けているのは、そのことではなかった。

太極拳を初めて中国で習ったのは 1981 年の夏、北京体育学院で国家太極拳の 48 式と陳式太極拳競賽套路を敢桂香 老師に習ったが、その当時は敢老師、門惠豐老師を含め中国国民全員が人民服を着ていて、黒い自転車に乗って、国は清貧だが美しい暖かい時代だった。  
それを皮切りに次に上海の上海体育学院との縁が深まった。  
王菊蓉 老師、施雪琴 老師、王培鋸 老師、邱丕相 老師、田金龍 老師、王震 老師などに学び、連続して短期留学を繰り返す、国家太極拳と競技太極拳、健身氣功、伝統太極拳、の数々を学習して行ったが、この時点ではまだ体育の延長にしか太極拳を捉えられてはいなかった。  
十年は過ぎた辺りだろうか。  
しかし当時は伝統的な太極拳の風格に、またその重厚な伝承体系と技術を超えて存在し活発に活動する「功」がまだみえていなかった。  
が、多くの伝人、名師、明師に直接現地で触れる機会をあたえられた。  
ただ説明のつきづらい伝統の世界に周囲を巡り続けながらではあるが、ただ没頭していった。  
国は解放改革に舵を取っていった。  
人、物、金の動きは大きくなっていった。  
中国の西洋化は始まった。

その中で出会い深い深い縁の始まりとして北海道で、北京航空航航天大学教授で陳氏太極拳新架式伝人の王幼復 老師と出会っていった。

そこで王老師の純粹な智より生じた凡ゆる伝統太極拳の発祥の地と伝人を訪ねる旅が二人で繰り広げられてゆくことになる。

最も貴重な出来事だったのは、王老師が日本人で不真面目で彼方此方と他流派も含め興味があり過ぎる私を、自らの開門弟子として拝師して下さったことだろう。

二人の探究の旅は始まっていった。

その旅のなかで、偶然西安で趙斌、趙幼斌 老師 親子の楊氏太極拳親族伝人に愚然に出会うことになる。

そこで伝統太極拳の親族によって丁寧に大切なシンプルな教えに触れることになる。

どうしても避けては通れない太極拳の伝統的な道程、套路だ。

ただ套路を毎日ある量をみずから繰り返すことの継続である。

これは考えているよりむしろ、ただの実践だけであり、やることが目的達成とは違っている。

ただやるのである。

目的すら失った繰り返す套路練習は、練習とも呼ばれず、ただの套路になり打って行く。

このとき套路がみずから語りだし導き出し示し始める気がしている。

自身の内の誰もが持つ悟性をはじめて耀きは始めるのだ。

套路については陳氏でも楊氏でも他の伝統武術でも共通して、老師達にみなさらりと言われ続けた。

云く、套路を毎日練るように、一日十回やるように、毎朝四回やるように...

言葉は直ぐその重要性は理解し、一回は数日か数ヶ月は実践もするのである。

しかしこれを数年、十数年、数十年とやり続ける人はほとんどいなかった。

苦練だった。

しかしやるべきことは、このことだったのだ。

興味でも目的達成の意志だけでも、楽しみだけでも自己証明でも、それは起こらなかった。

ただ套路を打ち続け、套路自体が伝統と伝承を開示して行くのを待つ。

そしてそこに想像を超えた、たくさんの時間が必要となり、効率も速攻性も消えてゆく、非現代的な時代錯誤な方法。

しかしそれが起こらないかぎり「功」は生まれてはこない。

そこから突き抜けて生活に溶け込むほど打つ、自然な套路があった。

坐禅に「只管打坐」ただ坐る があるが、正にただ坐り続けて坐りそのものになることを指すが、太極拳の套路にも同じ事が言えはしないだろうか。

ここで自分自身の坐禅と套路が一つに近づいて行く気がする。

自分が太極拳の人生の終盤にきて幸運だったのは、訪中を百回以上しても中国でも出会う

ことができなかつた小架式太極拳に日本国内で出会うことができ、身近に太極拳の蜜、太極拳の元々の味わいをそのままに厳格に非公開に伝承され守られてきた太極拳に日本国内で出会うことができたことだった。

しかも現代的なアカデミックな立場から、日本語で何のストレスもなく、15年以上に渡り、地元で継続的に嫡伝宗家にご指導を受けられたことである。

この陳沛山老師ご家族が来日され、小さなグループから関東圏、東北北海道、九州と各地に居点を変えながら拡大して、熱心にご指導を頂き日本で三十年経ったことは、日本に於いてのまだまだ短い未熟な太極拳の歴史のなかで、太極拳の神からの賜りもののような貴重な有り難い、太極拳の長い歴史に名を刻むような出来事だったと感じている。

それまではっきりしていなかった点、全く知らなかったこと、出来無かったことが出来る様になったこと、全てが他派に及ぶ事までが小架式を始めてから出来る様になっていたことだった。

太極拳の本質が日本で着実に芽吹き定着し育っている。

これは太極拳の歴史のなかで最大限に重要な出来事である。

禪 ...

普通ではないもの、日常ではないもの、哲学的なもの、なんだかわからないもの、宗教、一般的にそう捉えられている。

専門的には 不立文字 教外別伝 直指人心 見性成佛 と言われ、さらに謎めく。

太極拳を朝から晩まで四十年知ろうと求め続け打ち続けた。

すると求めることも消え失せ、ただ套路を打ち套路すらも消え去る時、そこには太極拳もなくただ太極だけがあった。

それを別名 禪 とよぶ。

完